

ロバート・ブルーム

明治の日本をアメリカに紹介した画家

Robert Frederick Blum
(1857-1903)

大野順子 Rothwell

江戸末期の嘉永6年(1853年)、突然アメリカよりペリー提督が率いる黒船が浦賀にやってきて日本中を震撼させた。それから4年たった1857年日本が開国か攘夷か騒然としている頃、アメリカのシンシナティでロバート・ブルームという一人の男の子が生まれた。彼が11歳の時(1868年)明治維新となったが日本開国のニュースも日本から遠く離れたブルームの住む街では話題にはならなかったかも知れない。

ブルームにとっての日本との出会いは16歳の時だった。道ばたで売っていた日本の扇を買い、その時のことを後にこう書いている。「今まで見たことのない、初めての物。私にとって突然の啓示といえるできごとでした。」そしてこの絵の好きな少年は次第に日本への関心を高めていく。

それから三年経って、1876年19歳になったブルームはフィラデルフィアのペンシルベニア美術学校で学んでいた。その年、そこではアメリカ独立百周年記念万国博覧会が開かれた。ブルームはすばらしい日本の展示をみて感動し、日本を訪ねたいという願いが大きくふくらむ。しかし実際に日本の土をふむまでにそれから13年待たなければならなかった。

ブルームは1880年に初めてヨーロッパに行き、イタリアのベニスでアメリカ人画家ジェームス・ウィスラーに会う。ウィスラーは油絵画家だが、ベニスではエッチングやパステル画も制作していた。そのパステル画に接したブルームは、すぐに鮮やかな色、手軽さ、絵としての質の高さなどパステル画の優れた特徴をみて自分も試してみるようになった。

その4年後、アメリカ人画家ウィリアム・メリット・チェイスとオランダに旅した。二人でよく野外の写生に出かけ、どちらもパステル画を手がけた。

アメリカに帰ったブルームはチェイスらと共にパステル画家協会を設立し、自ら会長となった。1884年、パステル画家協会の第1回パステル展を開いた。ブルームは12点のパステル画を出品した。この展覧会は1890年まで続いた。

ウィスラーもチェイスはアメリカ人画家としては第一に名前が挙がるほど有名だが、ブルームは今ではあまり知られていない。しかしパステルにおいては、ブルームはチェイスとともに高く評価されていた。

ブルームが33歳の時に ついに日本に行くチャンスが訪れた。もともとイラストレーターとして出発して、挿し絵も描いていたブルームは 雑誌"Scribner's Magazine"の仕事で日本に行くことになった。"Japonica"という記事の挿し絵を描くことになったのだ。この雑誌は記事と挿し絵、詩 短編など載せた知的な読み物として知られていた。

長年の夢だった日本にやっと着いたのは明治23年(1890年)だった。日本は期待に違わなかった。感激したブルームは到着して数日後、友人のオットー・バッチャーに次のような手紙を送った。「恋におちたら 相手の魅力がなにもかもを包んでしまうということがあるでしょう？ 今のところ日本は私にとってその状態なのです。日本を私のために

このままにして置いて下さいと祈っています。私は神に祝福された地に足をふみ入れたのです。私の人生の中で ぼんやりしたあこがれだったことが本当に実現したのです。」

ブルームは挿し絵のほかにも、彼自身の見聞きした日本のありさまを伝えようとして「日本に滞在中の画家」"An Artist in Japan"という記事を書いて雑誌社に送っている。

滞在期間はわずか2年半だったが、多くの油絵や 水彩、素描、パステル画を描いている。明治23年の日本には油絵も珍しかったが、パステル画はもっと珍しかっただろう。ブルームのほかに当時日本でパステルが描かれたという記録は見つからない。ブルームのパステル画はおそらく日本で描かれた最初のものではなかろうか。(明治の日本で描かれたパステル画を調べてみると この9年後 同じくアメリカ人の画家リラ・キャボット・ペリーが 日本でパステル画を描いている。)

ブルームのパステル画に 「青い帯」(The Blue Obi、 1890-1893)というのがある。黄色いうちわを持った着物姿の女性がたっており、青い帯をしめている。スケッチ風のパステルのタッチが 顔の表情や着物を浮き上がらせている。ブルームは日本の青や紺といった色が印象的だったようだ。「ここには 青が満ちあふれている。様々な色合いの青、日本の着物の基は 青色だ。」と雑誌への記事に書いている。ブルームの言っているのは きっと藍染めの紺色のことではないだろうか。

日本で描いた油絵には 通りの飴屋とそれを見ている子守たちを描いた"The Ameya"や日本髪若の若い女が畳にほおずえをついて絵本(版画と思われる)を見ている"The Picture Book"、目黒不動を描いた"The Temple Court of Fudo Sama at Meguro, Tokyo"などがある。

飴屋の絵はブルームの代表作とされており、ニューヨークのメトロポリタン美術館にある。写真から描いたのかもかもしれないと思わせるような、写実的な油絵で時間をかけて描いた様子がうかがえる。反対に"The Picture Book"は16cmX25cmの小さな油絵で目の前の若い女の人をさっとスケッチしたらしい、勢いのある絵だ。結び上げた髪や着物の色合いや絵に見入っている表情などよくとらえている。

45歳で亡くなったが 死後の回顧展が開かれた際、ニューヨーク・イブニング・ポスト紙は「ブルームのもって生まれた才能にはパステルがよく合っている。すぐ逃げて消えてしまう光や色の扱いなどにおいて特にそうだ。」と書いた。

友人の作家、オスカー・ワイルドは「ブルーム、君のすばらしいパステルは黄色のサテン布を食べているような不思議な感じがする。」と言っている。

1919年に出版されたマーティン・ビムバウム著「美術入門」という本の中ではブルームのことは次のように書かれている。

「パステルを扱う技術のうえから言うなら、ブルームの日本を描いたパステル画に勝る物はない。小さな棒状のパステルでブルームは芸者の肌をまるで白粉油でもつけたかのような絹の肌に描き出す。思いがけないパステルの光沢が魔術のようにちりばめられて宝石のように輝き出す。そのなかでも一番優れているのは この"青い帯"だろう。」

ブルームの作品はニューヨークのメトロポリタン美術館、バージニア州リッチモンド市のバージニア美術館、ワーナー・コレクション(アラバマ州)、ホロウィッツ・コレクション(ニューヨーク)に収蔵されている。

“Blum”という名前は英語の一般的な発音は「ブラム」だが、「ブルーム」と発音していた。両親はドイツからの移民なのでドイツ式に発音した。もともとはフランス語で「花が咲く」という意味で英語では“bloom”に当たる。日本からアメリカの友人オットー・パッチャーにあてた手紙の中に日本語で「ブルーム」と署名している。

参考文献

Robert Frederick Blum (1857-1903) and His Milieu

Bruce Weber, Dissertation, The City University of New York

American Dreams; Painting and Decorative Arts from the Warner Collection

David Park Curry, Virginia Museum of Fine Arts

American Impressionism and Realism; The Margaret and Raymond Horowitz Collection

Nicolai Cikovsky, Jr., National Gallery of Art

American Pastels

Doreen Bolger, The Metropolitan Museum of Art



The Blue Obi, 1890 - 1893, Pastel on canvas, 18" × 13" (40.5 × 33 cm)